

with acknowledged amateurs in the art of anti-colonial warfare. And what kept Phan and his comrades going was sheer tenacity, anchored in the undying dream to liberate Vietnam from the French.

The second is the awareness of early South-east Asian nationalists of their connection with other movements against colonial rule in Asia. Phan believed that Vietnam's struggle against French colonialism was a cause equally shared and believed in by China and Japan. While these countries eventually failed Phan with their lack-luster and erratic support for the Vietnamese nationalist movement, what is significant is the early nationalists view of their redemption as an inherent part of a larger regional quest for liberation. Vietnamese communists therefore could not claim sole proprietary rights to internationalism as they were preceded by Phan-Boi-Chau and his generation.

Finally, there is the absence of factionalism between Phan and his comrades. The autobiography lacks the ideological correctness that became characteristic of revolutionary movements in Southeast Asia in the Stalinist era (particularly when the Soviets began to call for a line of march different from and critical of other left-wing currents like the Trotskyists and social democrats the world over). Phan's initial support for the restoration of the Vietnamese monarch did not, in any way, create a rift between him and those comrades who openly advocated republicanism. This lack of political vitriol between two disagreeing positions would disappear by the 1930s as Stalinist methods began to dominate the radical wing of the nationalist movement. But by then Phan had receded to the political background.

(Patricio N. Abinales • CSEAS)

Christiaan Heersink. *Dependence on Green Gold: A Socio-economic History of the Indonesian Coconut Island Selayar*. Leiden: KITLV Press, 2000, vi+374p.

スラウェシ島南西半島部の東端に、耳飾りのようにぶら下がった細長い形の島がある。本書によって、ココナツ交易をめぐる社会経済史が明らかにされたスラヤル島である。本書は、17世紀後半から20世紀前半における、ココナツ交易による富の蓄積とその過程、島内の覇権争いと、社会経済的差異の出現に注目して記述された歴史研究である。

この島の地図上の位置はたいへん興味深い。第一に、島がマルク諸島とマカッサルを結ぶ航路上に位置することである。マルク諸島は、オランダ東インド会社(VOC)が香料の独占交易をおこなったことで知られる。マカッサルは、17世紀後半から東インドネシア地域最大の森林物産および海産物の集散地であった。第二に、島がスラウェシ島に隣接していることである。スラウェシ島は、移動性の高い生業活動と東南アジア島嶼部における活発な交易活動で知られるブギスマカッサルの人々の本拠地である。

スラヤル島は複雑な地形の島である。急峻な斜面が深く海に落ち込む東岸部、人口はもっとも多いが農作物の栽培に適さない土壌に覆われた北部、なだらかな丘陵部とわずかな平野部やマングローブの汽水帯と入り江が混合する中西部、もっとも肥沃な土壌を有する南部とに分けられるという。こういった生態環境の差異は、島の共同体の性格を多様に特徴づける。島の生態環境では、スラヤル布として商品加工される綿花とココナツ以外には、自給的に栽培される作物にも限りがあった。生態環境の異なる共同体間の社会関係において、ココナツが財としてgreen goldという価値を与えられるようになる背景である。

興味深い土地柄であるにもかかわらず、スラヤル島に関するまとまった歴史研究がこれまでなかったのはなぜだろうか。第1章で著者はその理由を次のように述べる。オランダ植民地政府が直接的に交易を支配しなかった「取るに足らない社会の研究」は、「民族誌家や文化人類学者にまかせてしまえ」とい

う、ヨーロッパ中心的な歴史観があるからだという。著者は、スラヤル島を「周辺」の島であると言う。「中心」となるのは、ココナツが輸出されるヨーロッパ市場である。本書では、raw material を産出する「周辺」地域が、「中心」からの経済的支配を甘受する過程について詳細に触れている。そして同時に、貴族階級の覇権争いや、中産階級の出現を背景とした固有のローカル経済圏でのダイナミクスが、スラヤル島に存在していたことも明らかにされている。本書は単なるスラヤル島の社会経済史として読まれるべきものではない。スラウェシ島南西半島部地域の地方史研究（1600-1950年）として位置づけられる本である。

香料交易やオランダ植民地支配遺制に焦点を合わせ、「周辺」と「中心」との従属的関係を強調して、インドネシア地域社会を解題する歴史研究が多い。本書の特徴は、ココナツ交易の仲買人として、スラヤル島と「中心」とを結ぶ働きを担った華人に注目した点であろう。スラヤル島のココナツ交易にかかわった華人仲買人は、*taukeh*（海産物や綿織物取引など早い時期からスラヤル経済にかかわった）、*peranakan*（現地女性との婚姻による社会的関係を基盤とした蘭領インド諸島生まれの華人）、*singkeh/totok*（蘭領インド諸島に来てまもない華人）に大別される。スラヤル島からヨーロッパ市場へのココナツ交易の結節点は、マカッサルであった。彼らのいずれもが、マカッサルを取引上の拠点とし、スラヤル社会との密接な関係を築いたという。土着宗教や伝統的社会が色濃く残る南部では、華人とイスラム女性との結婚も多く見られ、共同体間の社会文化的差異を生じさせる原因ともなった。

本書の資料には、インドネシア国立公文書館（南スラウェシ州およびジャカルタ）の史料およびVOC文書が利用された。スラヤル島での著者による聞き取りは、20世紀前半のココナツ交易最盛期のスラヤル社会再構築を支える。本書は1995年にVrije Universiteitへ博士論文として提出されたものに、修正を加えて出版された。

全10章は基本的に時系列に構成されている。複数の重要なトピックが、ひとつの章の中に盛り込まれているため、章の筋がつかみにくい。人名、地名、組織名ごとに作られたIndexは一般的な項目を網

羅しておらず、きわめて使いにくい。しかし、これから博士論文を書こうとする院生にとっては、歴史資料と聞き取り結果の扱い方や、時代区分の設定の仕方など参考になるところは多いかもしれない。

第2章では、スラヤル島の生態的背景と農作物栽培の状況が概観されている。17世紀初頭のスラヤル島前近代社会の様子が、スラウェシ島本土のブギスマカッサルとの交易をめぐる社会経済的関係の記述から窺える。

マカッサルの覇権をめぐる、ポネ王国/オランダ連合軍とゴワ王国との戦争は、1667年に収束をみた。同年、スラヤル島にマルク諸島とジャワ以西との交易を監視するための事務所がおかれた。第3章と第4章では、18世紀初頭から19世紀前半の社会経済的状况の変化が叙述されている。オランダ植民地政府が、スラヤル島における交易活動へ正式な介入を始めた時代である。

ここで強調されているのは、スラヤル社会独自の経済ネットワークの存在である。伝統的な交易品目であるナマコ・ココナツ・スラヤル布は、スラヤル島と周辺の島嶼部とのネットワークを築く鍵となった。オランダ植民地政府の統制がはじまる前段階の、「周辺」のなかの「中心」としての島の社会経済状况が描かれている。

第5章では、19世紀後半のスラヤル社会の急速な商業活動の拡大と、植民地政府による支配浸透の過程が明らかにされている。島が、やがてココナツ交易の最盛期を迎えようとする頃である。この時代のスラヤル社会で特徴的なことは、生態環境の異なる各共同体が社会経済的発展の速度と内容の違いを呈したことである。たとえば北部は、ココナツをはじめとするローカル産品の取引によって、比較的裕福な層が厚かった。メッカ巡礼を果たす者(haji trader)も多かった。かれらはその信用とネットワークを頼りに、ローカル経済圏でのココナツ交易を取り仕切った。

1860年、蘭領インド諸島内では奴隷制が廃止され、奴隷交易は厳重に取り締まれるようになる。スラウェシ島沿岸部では、奴隷買いの海賊を恐れる必要がなくなった。スラヤル島で、小船を利用したローカル商人によるココナツ取引が増加したのはこのころである。シンガポール建設以来、衰退するは

かりであったマカッサルが、自由交易港として復活したことも、重要な出来事であった。マカッサルを中継点としてココナツがいよいよヨーロッパ市場へ大量に出荷され、「中心」―「周辺」の関係が顕在化することになった。華人が島のココナツ交易に深く関わるようになるのも、この時代のことである。

興味深いのは、島における綿花栽培に関する記述である。手の込んだ模様が織り込まれているわけでもない、細かい格子柄の粗い布地のスラヤル布は、蘭領インド諸島において広く流通した。スラヤル布はローカル商人によってマルク諸島へ運ばれ、香料と交換するための必需品であった。ローカル商人が、独自のルートを頼りに香料交易に関わっていたということである。たいへん新鮮な視点からの記述である。

オランダ植民地政府はスラヤル布の流通度に目を付けた。付加価値のより高い布の生産を目論み、上質の外来綿栽培を試みた。しかし、外来種はスラヤル島の土壌と気候に適さなかったうえ、在来種に比べて手間がかかることがわかり、計画は失敗した。うまくすればプランテーション経営の強制栽培へと移行させるつもりであったらしいが、これ以降、スラヤル島ではココヤシ栽培への特化が急速に進むことになる。

第6章では、19世紀後半から世界恐慌直後までのヨーロッパ市場でのココナツの需要が、スラヤル島とマカッサルに与えた社会変動の歴史的展開が分析されている。

オランダ王立郵船会社 KPM が、蘭領インドに定期航路を開設したのは19世紀後半のことであった。スラヤル島は定期航路の寄港地となり、近隣島嶼部からのココナツの集散地となる。このことにより、マカッサル港にはかつてない量のココナツが集められ、ココナツだけをみればシンガポールを上回る規模となったという。

ヨーロッパ市場におけるココナツの需要が高まった背景は、直接的には増加する都市労働者を対象とした、バターに替わる低価格の食用油脂を原料としたマーガリン増産にあった。その後、浴用石鹼や洗剤の原材料、20世紀に入ってからは爆薬の一部としてココナツ油が使われるようになる。Taukeh は KPM を利用して蘭領インド諸島をくまなく回り、

ココナツ交易をほぼ独占した。

オランダ植民地政府は、スマトラ島でのゴム農園経営の成功を再現させるべく、ココヤシプランテーション経営を期待した。しかし数年で樹液の採取が可能となるゴムと違い、ココナツの場合、最初の収穫までに8～10年はかかった。そのため、従来どおり、貴族が所有する農園や、トゥモロコシや自給的野菜栽培の傍らに、小規模自作農が栽培するココヤシに頼らざるをえなかった。

興味深い指摘は、小規模自作農が、ココナツ取引を、価格変動を睨んで投機的に収穫・出荷するもの、と認識していたということである。ほぼ同時期のジャワ島では、商業作物の強制栽培に、農民が辛酸をなめていたことと比べると、なんとという違いだろう。スラヤル島に心血を注いでも、「不毛の地」なのだから、たいした収穫があるとも思われなかったのである。オランダ植民地政府の先入観に負うところも、大きかったのであろう。起伏に富む島の複雑な地形は、土地調査の役人が内陸部深くまで分け入るのを、拒んだのであった。

華人仲買人が両者の間に存在したために、こういった小規模自作農の戦略を、オランダ植民地政府が制することができなかったというのも、たいへん興味深い指摘である。残念なことは、スラヤル島民のこの戦略が、どのような背景のもとに生み出されたのかに関する言及がなかったことであろう。

しかしココナツ景気は長続きしなかった。ココナツ油の精製技術の革新が進み、コブラ（乾燥ココナツ果肉）の質や産地を問わなくなったこと、大豆や落花生などその他の植物油の加工技術が開発されたことなどによる。第一次大戦後、わずかに盛り返したココナツ価格は、以後長期的な低下傾向をたどりはじめる。

第7章では1880-1930年におけるスラヤル島の経済的变化の過程へミクロな視点が向けられている。このころ、ココナツ交易を独占する華人仲買人以外に、小船を繰り独自のルートでココナツ交易の隙間に食い込んでいくローカル商人 *papalele*（下級貴族や富裕な庶民）の台頭が著しくなった。ここでは、両者の活動を軸に、スラヤル島の交易がコブラ生産へと特化して過程が明らかにされている。

19世紀後半には、島は日用品や食料品の交易をほ

ぼスラウェシ島本土のブギスに頼るようになっていた。島内の利用できる土地すべてにココヤシが植えられ、あげくには新しい家を建てる場所さえなくなることもあったという。マカッサルへ労働力として移住し、財を蓄えてスラヤル島へ戻ってくる者が、1920年代後半には人口の1割に達したという。周辺の島嶼群へ移住し、コメや野菜を栽培し、スラヤル島へ「輸出」する者もいた。

沿岸部漁村でもココヤシ栽培に専従する者が増えた。スラヤル島民は、その本来の生業が何であるかにかかわらず、ココヤシ栽培による現金収入に頼る傾向を加速させていった。スラヤル社会は、ココナツ交易によってヨーロッパ市場経済に組み込まれてしまったのである。その結果、自律的な経済活動を失いつつあった。第8章では、このようなココナツへの経済的依存傾向が高まるスラヤル島における社会変容が明らかにされている。ココヤシの本数が社会的地位を計る尺度となり、婚資として社会関係を形成する場面に重要なものとなった。*Papalele* は、経済的成功だけでなく、社会的な地位をも獲得した。一方で、伝統的支配者 *opu* の権威は失墜した。

第9章では、世界恐慌によるココナツ交易への打撃以降、第二次大戦による日本軍の占領時代を経て1950年までのスラヤル島内の社会経済的変動が明らかにされている。皮肉なことに、ココナツ価格の暴落を止めることができなかったのは、スラヤル島にココナツプランテーションがないことであったという。オランダにとって直接的な痛手がない以上、島民を保護する必要はないのだからだという。急激な社会変化に対応するため、イスラム改革主義の傾向が強まった地域もみられた。

終章では、各章の要旨と主張を確認したうえで、

結論が述べられている。スラヤル島は、単にオランダ植民地政府やヨーロッパ市場に対して従属的であったのではない。「周辺」における華人、中継港マカッサル、そしてローカル経済圏における活発な活動が作り出す動態を経験していたのである、という結論が述べられている。

本書が著されたことの意義は、次の2点にある。ひとつにはヨーロッパ中心の地理的史観あるいは研究対象地の枠組み設定を問い直すという点、もうひとつには「周辺」の地方史叙述の可能性を拓いたという点である。歴史研究に限らず、東南アジア研究や地域研究においても、従来の研究対象地域の枠組みや区切り方は、所与のものとして踏襲され続けてきた。本書は、従来の研究対象地域の設定の仕方に、再考を促すヒントを与えたともいえる。ヨーロッパ中心の歴史的視点では、とらえられることのない地域への視座を築いた。「周辺」と「中心」の研究に終わらず、華人の活躍を視野に入れたことも評価される。本書の中では、華人は単に外部からやってきて仲買人として扱われるのではない。地方史におけるアクターのひとりとして、華人仲買人へ向けるまなざしが、画期的である。

東南アジア地域の日常生活において、ココナツは今日でもなお欠かすことのできない食材のひとつでもある。市場の一角に積まれたココナツの山を目にすると、いつのまにか、ココヤシに覆われたスラヤル島の島影が思い浮かんでくる。本書は、ひじょうに精緻に分析されたココナツの社会経済史である。そのうえに、このような余韻を読後に残させるのは、スラヤル島という場所に対する著者の細やかな愛着が、描写されているからであろう。

(濱元聡子・東南ア研)